

「強く、雄々しくあれ」

今日は、まず皆様に謝らないといけなくて。先ほど、お読みいただいた聖書箇所を聞いて、「変わったところだなあ」とか、「なんか語り出しの部分が中途半端だなあ」とか、思われた方いらっしゃるかと思います。「また牧師は奇を衒った聖句で説教をしようとしている」と勘ぐられた方もいるかも知れません。いや、ホントなんでこうなったか謎でしかないのですが、実はこれ、聖書箇所を間違えて先週の週報に書いていてしまっていたんですね。本当は、ヨシュア記 1章5～9節でした。ちょっと見てみてください、1章5～9節。340 ページです。6節のところに「強く、雄々しくあれ」という説教題にした聖句がありますよね。この聖句に基づいて説教をしようと思っていたんです。そう思い巡らせながら、私は1週間過ごしてきました。んですけども、先日、今日の週報を作るために、説教予告を確認してみますと、何故か、そこには「ヨシュア記 5章5～9節」と書いてあるわけです。謎ですよ。自分でやっという謎でしかありません。この謎な現実を前にして、しれっと今日の週報の式順序を「ヨシュア記 1章5～9節」に書き換えてしまおうかとも思いました。でも、なんとなく、そうすると大切な約束を破ってしまうような感覚になって、「いや、これぞ御心か」と開き直すことにしました。牧師をしばらく続けていると、まあ、そういうこともありますよね。他の牧師のことは知りませんが。と言うわけで、今日の御言葉は、私にとっても、まさに「与えられた」御言葉です。自分で熟慮して選んだわけでも、聖書日課から納得して受け取ったわけでもない、突然に降り掛かってきた御言葉です。だとしても「割礼かあ、んー、どうしよ」というのは、私の正直な心の声ですね。でも、語ってみたいと思います。

今日の聖書箇所は、イスラエルの民がモーセに率いられて出エジプトをした後、約束の地シオン

を前にして、「割礼」を施されたことを伝える場面です。聖書における「割礼」と言うのは、男性に限られたもので、男性の性器を覆っている皮を切り取る、という宗教儀式です。ただ、他の文化文明を見ても男子割礼だけでなく、女子割礼というものもあります。女子割礼に関しては、現在、世界的に悪しき慣習であるとして批判、根絶の方向で進んでいます。と言うのも、女子割礼は、女性の行動制限と役割の固定を目的に儀礼化、制度化されてきた歴史的背景が明らかで、健康被害も多いからです。一方で、男子割礼に限って言えば、おそらく、もともとは身体の清潔や、感染症の予防という現実的な目的があったのだと思われます。「清潔である」という状態は、神様の御前における清らかさ、相応しさに繋がりました。また、感染症の予防は、民族全体の健康と発展の維持、つまり「産めよ増えよ」という祝福に繋がりました。そういう理解から、男子割礼は、旧約聖書において、またユダヤ教において、重要な宗教儀礼となっていたのだと推察されます。

という、そういう前提となる理由があって「割礼」はイスラエルの民における最重要儀礼に位置付けられたのでしょう。そして、「割礼を受けていない男性は、イスラエルの民ではない」との認識にまで至りました。今のような国際理解、国境を超えての融和や、異文化理解が皆無であった当時において、「割礼」の有無は、共同体からの孤立という現実的な問題と、神様の救いから漏れてしまうという宗教的な問題も含んでいました。だから、神様が約束されたというシオンの地に入る前に、割礼を受けることは、イスラエルの民にとって死活問題だったんですね。

ただ、ここで気になるのは、出エジプトを成し遂げた人々は、すでに割礼を受けた成人だったはずだ、ということです。エジプトでは、イスラエルの民は自分たちの宗教儀礼を不自由なく実施できたので、すでに割礼を受けた人々が、神様の憐れみを受けて出エジプトしたはずなんですよ。その辺りに事情が、今日の聖書箇所の一つ前の4節から合わせて読むと、良く分かります。「ヨシュアが割礼を施した理由はこうである。すなわちエジプトを出て来たすべての民、戦士である成人

男子は皆、エジプトを出た後、途中の荒れ野で死んだ。出て来た民は皆、割礼を受けていたが、エジプトを出た後、途中の荒れ野で生まれた者は一人も割礼を受けていなかったからである。イスラエルの人々は荒れ野を四十年さまよい歩き、その間にエジプトを出て来た民、戦士たちはすべて死に絶えた。彼らが主の御声に聞き従わなかったため、我々に与えると先祖たちにお誓いになった土地、すなわち乳と蜜の流れる土地を、彼らには見せない、と主は誓われたのである」。というような理由で、無割礼の人々だけが、イスラエルの民の中に残されたのです。そこで、約束の地シオンに入る前に、ちゃんと割礼をしましょう、ということになりました。

割礼に関する古い話は、ここで終わりにします。ここからは、新約聖書、キリスト教における割礼の位置づけという、新しい話をしたいと思います。キリスト教において、割礼は、男性器の包皮を切り取る、という宗教儀礼ではなくなりました。代わりに「心に施された割礼こそ、(本当の)割礼なのです」という意味に進化しました。つまり、私たち、キリスト教を信じる者にとって、割礼とは、老若男女問わず「心に施されるもの」ものであるということです。ところで、「心に施される割礼」「心を覆う皮」と聞いて、皆様は何を連想したり、想像したりするのでしょうか。私は、立場とか、建前とか、社交辞令とか、虚栄心とか、強がりとか。もっと言えば、遠慮とか、調和とか、自己犠牲、ということのを思い浮かべます。特に日本人だからとも言えるのでしょうか。私たちは、自分の心の声、言い換えれば、本音を、様々な理由から皮に包んでしまいがちです。祈る時でさえ、神様に対して、包み隠すことがあります。隠したところで、それは全て神様にはお見通しであるにも関わらず、ですね。もちろん、社会や共同体を円滑に過ごすために、建前や遠慮というものは必要でしょう。しかし、そればかりを気にしては、私たちは到底「強く、雄々しく」あることはできません。

「割礼」は、新旧約聖書を通して継承され続けてきましたが、その意味するところは、男性だけ

の肉体的な割礼から、性別を問わない心の割礼へと変わって行きました。ただ、その中心にある「主の御前における相応しい在り方になる」という点だけは、変わってはいません。神様の御前において心の全てを包み隠さないでいること。それが、今を生きる私たちにも通用する割礼の意味であるかと思います。対人関係においては、包み隠すことがあっても当然です。個人の秘密は、基本的な人権の一部です。ただ、私たちの命や人生を支えてくださる神様にだけは、素直でいたいものですよ。ね。

素直な、ありのままの自分を愛してくださる神様がいること。その信仰が、私という存在を力強く支え、結果として「強く、雄々しくある」ことへと繋がっていくのだと思います。自分を弱いと自覚することは大切です。その上で、自分の弱さを補い、また用いられる神様がいると確信することで、私たちの言葉と行いは、より一層確かなものとなり、力づけられるのです。振起日だった先週の説教でも同じことを言いましたが、誰でも、一人では気持ちや心を振るい起こすことはできません。友がいて、神様がいなければ、人1人の奮起など大したことありません。それは、「強く、雄々しくあれ」という御言葉についても同様です。一人では、「強く、雄々しくある」ことはできないのです。信仰を同じくする仲間がいて、一緒に讃美歌を歌い、祈りを合わせる友人がいて、そして、いつも隣にいて支えてくださる神様とイエス様がいて、風に乗って行き交う聖霊があること。そんな多くの支えや励ましを信じて受け入れることで、私たちは、自分の力を大きく超えて、「強く、雄々しく」あることができるのです。それが、信仰を持つ者の良い所ですよ。ね。

クリスチャンになって良かったなと思っています。

人は、悲しく落ち込んでいる時ほど、孤独に思うものです。しかし、「強く、雄々しくあれ」と言われる神様は、私たちを孤独に置き去ることはありません。必ず相応しい助け手を備えられ、御自身も救いの御手を差し伸べてくださいます。そういう揺るがない大前提があった上での「強く、

雄々しくあれ」ということです。今週も、神様に対して心を包み隠さない、全幅の信頼を置いた、割礼済みの相応しい姿で参りたいと思います。主を信じる皆様の上に、豊かな祝福と導きがありますように。最後にお祈りを致します。

神様。今日も、何の功もない私たちを、この礼拝堂へと招いてくださり、感謝致します。あなたは、古くからご自分の民に割礼を求めて来られました。それは、あなたの御前における相応しい姿を願われたからだと信じます。今、私たちは、心に割礼を受けた者として、あなたの御前にあって祈りを合わせています。どうか、あなたへの信頼で満たされた、この取り繕わない素直な祈りに、しっかりと耳を傾けてください。今日から始まる1週間も、あなたが共にいてくださることを固く信じて、強く、雄々しく歩み通すことができますように。私たちの信仰を支え、導いてください。

このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。